

## 「庭野日敬開祖随行記」

『庭野日敬 経営者心得帖』は「六花の会」会員の必読書です。庭野日敬開祖は、いったいどんな人物だったのでしょうか。

「六花の会」推進副責任者のひとりでもある佐藤益弘・教団常務理事は、庭野開祖の秘書を15年間務めました。その随行記を通して、庭野開祖の心と生き方を学びます。

### 著者紹介

佐藤 益弘（さとう・ますひろ）

「六花の会」推進副責任者のひとり。26歳から41歳までの15年間、庭野日敬開祖の秘書を務める。その後、湘南・富山・福井・京都教会長を歴任。2019（令和1）年から教団常務理事。

## 「物も拝む心で」

私が秘書室へ配属となったのは1983（昭和58）年12月でした。

そのころ、開祖さまは満77歳でしたが、毎朝、法輪閣の玄関に到着されると、エレベーターには乗らず四十段の階段を一気に登られるほどお元気でした。

新米秘書の私に、いろいろなことを早く覚え、たくさん経験を積んでもらいたいという上司の願いに依り、ご本部とご自宅との日常送迎のお役をすぐにいただきました。

緊張しながら「もしも先生から話しかけられたらどうしようか…」などと、26歳の私はドギマギしながら陪乗したのを覚えています。

そして、無事にご自宅へお送りしたあと、ふと、開祖さまがお座りになっていた後部座席を見ると、ご愛用の膝掛けがキチンとたたんで座席の上に置かれてありました。

開祖さまご自身で、降車される前には丁寧にたたまれるのです。十数年お仕えした中で、一度たりとも膝掛けを放り投げるというようなことはありませんでした。

人間のみならず、物をも生きもの同様に拝まれました。

## 「慈眼視衆生」

平成の時代に入った、ある元日のことです。当時は『初詣り』という名称のもと、午前零時から大聖堂で式典が執り行われ、開祖さまより、年頭のご法話を賜りました。

その式典後、開祖さまは聖壇控室から永寿殿へ移動されることになっていましたが、時間が伸びたため、急いで聖壇控室を出る必要に迫られていました。

開祖さまも時間を気にされていらして、聖壇用のお履物のまま控室を出ようとされたので、秘書である私が「先生、こちらでお靴にお履き替えください」と申し上げました。

すると、開祖さまは「よく気が付いてくれたね。君のお蔭で助かったよ。どうもありがとう」と満面の笑みでおっしゃったのです。

私は秘書として当然のお役を果たしたままで、予想外のお言葉に感動したのです。開祖さまは常に「慈悲の眼」をもって弟子の働きをも見てくださり、報謝の心をさらに起こさしめてくださるお方でした。

## 「何ごとにも一所懸命」

開祖さまの何ごとにも一所懸命な姿勢は、随所に現れていました。特に有名なのは大相撲をテレビ観戦されているシーンです。これまでに記録映像や機関誌紙などでも紹介されましたとおり、ご自分が力士になったつもりでご覧になっているため、ご最員の力士が土俵際まで攻め込まれて負けそうなときなど、必死にこらえようとされるのです。私もよく拝見しましたが、思わず目の前のテーブルにつかまり、それが前に動くほどでした。

開祖さまは信者さんのお説法を聞かれるときも、秘書をも傍に寄せつけないほど、脇目も振らず説法に聞き入っていらっしゃいました。

また、ご自身が法話を述べられた後など、冬場でも汗びっしょりでした。

さらに、教団の様々なデータをご覧になるときも、赤鉛筆と青鉛筆をくっつけて 1 本にまとめた『赤青鉛筆※』を右手に、真剣に目を通されていました。

開祖さまから私が学ばせていただいたことは、「その時々授かったご縁は宝物」という気持ちで、喜んで生きるということです。

以来、「朝夕のご供養をしなければ」という気持ちではなく、開祖さまのように「お経をあげる時間を授かって有難い！」という歓喜の心をもって努めるようにしています。

※『朱藍鉛筆』という商品名もある。

## 「あなたは癌になる資格がないよ」

開祖さまのご親族の一人が、佼成病院（正式名称：立正佼成会附属佼成病院）に勤務していたため、教団関係者の入院情報は、速やかに開祖さまのもとに届くようになっていました。

前夜に、誰々さんが入院されたとの話を聞かれると、開祖さまは翌日さっそく佼成病院へ御見舞いに行かれることが多くありました。

開祖さまの御見舞いを受けられた、ある教会長さんが「私は、癌かもしれません…」と言われたところ、「大丈夫！あなたは癌になる資格がないよ」とおっしゃいました。その方はいっぺんに安心され、頬に赤みがさす様子を、私は今でも覚えています。

開祖さまは、また、入院中のお兄様を見舞うため郷里・十日町へ日帰りで行かれたことも

ありました。

公私ともに自身を支えてくださる存在に感謝し、大事にする。気になる人のところへは、いち早く伺う。開祖さまのリーダーとしての心構えと姿勢を学んだ次第です。

## 「物も大事に使う」

晩年に、開祖さまがお使いになったお鞆の中身については、開祖さまに関する写真集や機関誌などで、既にご紹介されています。

そのお鞆は、大き目の黒色のパイロットケースであり、それなりの重量でした。

当然のことながら、秘書がご出張時も含めて、常にお鞆を持たせていただいております。

あるとき、傷の絆創膏など救急用品が入っている袋を出したとき、メンソレータムの容器が私の目に飛び込んできました。

なぜかと言うと、その容器は明らかに塗料が一部剥脱しているような古いものだったからです。私でしたら、長いこと使っているし、新しいもの買い替えようと即座に考えます。

しかし、開祖さまはそのようなことはお構いなしで、どこまでも物のいのちを拝まれ、大事にお使いになっていました。「使い捨て」という言葉など、およそ縁遠い話です。

開祖さまのお姿を拝し、物についても、徹底して大事に使うことが「リーダーの要件」なのだ、私は学びました。

ち早く伺う。開祖さまのリーダーとしての心構えと姿勢を学んだ次第です。

## 「背中も大事」

開祖さまのお言葉を、私は今も忘れることができません。

それは「平成6年次 教団幹部指導会」のご法話です。著名な仏師の方が、ある人に仏像を彫るときいちばん難しいのは仏さまのお顔ですか？と尋ねられて、「いや、背中です」と答えられたというお話です。

浅はかな私は、仏像の背中は見えませんし、ほとんどの人は見ようもしないので、手を抜いても問題ないでしょうと、一瞬思いました。

しかし、背中が大事である理由について、開祖さまは「その見えないところこそが大事だということです。心を込めて、その背中を彫ってこそ、正面から見るお顔も、全体のお姿も、おのずと手を合わさずにいられない、命の通う仏さまになるということです」と教えていただきました。

このことから、何事も表裏一体であることを忘れずに言行一致する人になろうと、私は起請しました。そして、佼成会で「後ろ姿で導く」と教えられている意味を反芻したのでした。

## 「あの二人に任せよう！」

平成元年6月19日午後のことです。

開祖さまは、雨が降り注ぐ中、大聖堂から羽田空港に向かわれました。伊豆・大島のご巡教のためです。

先遣隊の秘書（33歳）と操車担当（52歳）の二人は、開祖さまの1便前の飛行機で大島に到着していました。

その後、大雨と濃霧により、開祖さまが搭乗予定の飛行機をはじめ、すべての便が終日欠航となってしまいました。

緊急対応として、竹芝栈橋から船で渡るか、明朝、一番早い飛行機で大島へ向かうかなど、様々な案が検討されました。

その内容を開祖さまにお伝えしたところ、「あの二人にすべてを任せよう！私の代わりに説法してもらえばよい！」とおっしゃり、空港からご自宅へ戻られました。

弟子に全幅の信頼を寄せ、心から信じて任せるというご決断。開祖さまの器量を物語るエピソードです。

## 「成功への手引書」

『庭野日敬 経営者心得帖』の71頁で開祖さまは次のように述べられています。

「成功している経営者には、共通点があるといます。勉強好きで働くことが好き。どんな相手、どんな問題にぶつかっても、よいほうだけを見られるプラス思考型。そして、周囲によい師を見つけるのが上手で、学んだことをすぐ実行する…。これができれば、事業にかぎらず人生の成功間違いなしです」

教団史によりますと、開祖さまは横須賀海兵団舞鶴練習部へ入団後、六か月にわたる海軍生活を過ごされました。そして、卒業試験では、分隊196名中一位の得点をおさめられるほど熱心に勉強されたと書かれています。

晩年、外部団体主催の学習会などでも、必ずペンを持って講師の話に耳を傾けられましたし、学んだことを即実行に移されました。

「私は楽観主義だから」とおっしゃりながら、難題にも向き合われたのです。

## 「長としての自覚と行動」

昭和60年に行われた新日本宗教団体連合会（新宗連）の全国総会は、会場が広島ということもあって、原爆死没者慰霊碑に参拝する予定が組まれました。

他教団とは、ダークスーツを着用すると打ち合わせていたのですが、開祖さまは既に儀礼服を用意されていました。私は開祖さまにスーツの着用をお勧めしました。

ところが、厳しい表情をされ、頑としてうなずかれません。そして当日、新宗連理事長である開祖さまだけが、儀礼服を召されて参拝に臨まれたのです。

他教団の先生方が平服でも、先頭に立つ理事長（開祖さま）が正装で慰霊に臨まれたことで、一行全体のまごころ、誠意がさらにはっきりと表れました。同時に慰霊がどれほど大切なことであるか、私は心に深く刻むことができました。

人の上に立つ者の自覚、それに基づく行動のお手本を見せていただいた瞬間でした。

## 「何ごとも ど真剣に」

京セラを創業され、無給で日本航空の再建を手がけられた稲盛和夫氏が、先月 24 日にご逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

福永正三先生は稲盛氏に師事し、何ごとも『ど真剣にやる』ことの大切さを教えられ、それを「仏教経営者塾」で説かれました。

開祖さまも「真剣勝負」のお気持ちで種々の行事に臨まれました。伊勢の神宮参拝や日本武道館で催される「全国戦没者追悼式」などへも、フロックコートをお召しになって厳粛な面持ちでお出かけになりました。

勧請式では、勧請家数を何度も確認して法話に立たれ、御命日式典では説法者の姓名鑑定をしながら熱心に聴かれました。

いずれの場面でも、開祖さまが目の前のことに集中されているときは、他を寄せ付けられないムードが周囲に漂っていました。

自ら努力し、人さまの幸せを願い、ど真剣に生きる指導者の共通点を学ばせていただきました。

## 「目立たぬ存在にこそ合掌」

新潟県十日町市の「生誕地まつり」に、開祖さまのお供をしたときのお話です。

同まつりが盛大に催された翌朝、十日町教会長と総務部長が「生誕地まつり」の御礼言上と、「お師匠様がお疲れではないか」と案じ、菅沼練成道場にやって来られました。

ニコニコして面会された開祖さまは、教会長らにこう告げられました。

「有難いことに、無事に大行事ができたのも、警察と消防のおかげです。早速、各署に品物を持って御礼の挨拶に行ってもらいたい」

私は「えっ、警察も消防も通常の職務を果たされたのだから、特にお礼など必要ないのではないか」と思いました。

しかし、開祖さまのお心は「何かひとつでも事件や事故、火災などが起きたりすれば、全てが台無しになってしまう。警察と消防の皆様が予防に努めてくださったおかげさまで、おまつりが成就した。各署には感謝してもしきれない」というものです。

目立たぬ存在にこそ合掌する。その大切さを教えていただきました。

## 「日々、お経をあげ続ける」

晩年の開祖さまは、ご供養前に目薬を点眼されたり、本などがはっきり見える専用の眼鏡に替えられたり、補聴器の電池容量を確認されたりというように様々な準備をしながらも日々のご供養を欠かさませんでした。

かつて東芝の会長・経団連の会長を務め、臨時行政改革の推進にも尽力された経営者であり、法華経篤信家でもあった土光敏夫氏も毎日、朝と夕に読経されたそうです。

世のリーダーといわれる人は、大事な勤めを日々続けるという共通点があるようです。

開祖さまのご著書『我汝を軽しめず』の中に「いずれにしても経典読誦は、初信の方から幹部さんまで、欠かしてはならないお勤めであって、信仰者としての真の喜びの源泉でもありますから、どうか朝に夕に心をこめて行なってほしいと願ってやみません」と記述されています。

お互いさまにお経をあげる生活をいっそう大事にしまいたいものです。

終わり